愛知工業大学研究報告
第３８号Ａ平成１５年

松本清張研究（I）：『火の縄』の或る技術者の倫理

A Study of Seicho Matsumoto（I）：An Engineer's Ethics in *Hi no Nawa*

宮　海峰†　　森　豪††

GONG Hai Feng　　Tsuyoshi MORI

Abstract This paper deals with an engineer's ethics in Seicho Matsumoto's *Hi no Nawa*. The main character, Iganokami Naoie Inatomi(called Iga in this paper) is an engineer who has a genius for a Tanegashima, an old Japanese gun. He served two lords, Yoshiari Isshiki and his wife Iyo, and Tadaoki Hosokawa and his wife Tama. Iga had a good relation with Iyo who was honest and tender and loved the natural environment around her castle. When they were attacked, Iga kept using his Tanegashima to protect her. He would have been satisfied even though he died with his genius for the gun. But Iga was disliked by Tama who was very egoistic and he disliked her, too. When they were attacked, Iga left her in order to hand down his technique to his posterity. But when he left her, he was called a betrayer who had no ethics. Ieyasu Tokugawa made him know that Iga was praised for his genius for the gun but he was not treated as an ethical human being. Iga disliked his own genius for the first time but we must not forget he kept using his genius in order to protect Iyo to whom he had an affectionate relation and never lost his ethics. We can say that ethics as a mere duty is fragile but ethics supported by love has a power to make an engineer work selflessly as an ethical human being.

１．はじめに

半藤一利は、『清張さんと司馬さん』（NHK 出版）に於いて、晩年の司馬遼太郎の日本国や日本人への憤りに触れ、司馬の絶筆となった『風塵抄』の、「日本国の国土は、国民が拠って立ってきた地面なのである。その地面を投機の対象にして物狂いするなどは、経済であるよりも、倫理の課題であるに相違ない」という言葉で始まる最後の言葉を引用し、次のように司馬の言わんとしたことを解説している。

> バブル経済なんて、日本人の欲ぼけに過ぎない、という司馬さんの憤りです。すなわち、かつてのよき日本人がすべてそうであったように、「名こそ惜しけれ」とみずから律してきた日本人はどこへいったのか、という嘆きでもあるでしょう。司馬さんは、小説をとおして、おのれを殺して世の中のために尽くすという、日本人が昔からもっていた律儀さ、実直さを諄々と説き、警鐘を鳴らしつづけたわけですが、平成日本はついに聞く耳をもたないのか。　(102)

土地を投機の対象にしたバブル経済への批判であるが、それが経済の問題ではなく、倫理の問題であると司馬が言っていることに注目したい。日本人の根本的なものの考え方がおかしいというのである。それならば、正しい考え方とは何か。それは「日本人が昔からもっていた律儀さ、実直さ」であり、司馬は「小説をとおして、おのれを殺して世の中のために尽くす」ことの大切さを諄々と説いたという。半藤は「物質的繁栄をとげたあとの平成日本は『公』を失い、私欲に走り、救いがたいほど悪くなっている」という。

†　東南大学（南京市）
††愛知工業大学（豊田市）

半藤が司馬から直接聞いた最後の言葉は、「自然をこれ以上壊さないということ」であり、「空を見ても、川を見ても、山を見ても、ああ美しい、いい国に生まれたなという思いを、子供たちに残す」ということであった。半藤はそれらを「これ以上私たちが欲望を拡大しない、贅沢を望まない、ということを全員で合意すること」であると言い換えている。豊かになろうという欲望は、開発のために自然破壊を導いてきた。贅沢を求めず、自然を破壊しないで、美しい自然を残そうというのである。そこに倫理があるというのである。

司馬は、自然保護という考え方には、国民の８０％か９０％の合意が得られるとも考えている。この数字は、半藤の言う「公」を考えるのに重要である。「公」は「私」ではない。国の、または社会の「公」になるには、何％の支持が必要かということになる。司馬は、８０％から９０％の支持が得られるから、その考えは「公」になるというのである。

「公」のためにするということ、「おのれを殺して世の中のために尽くす」ということ、これらは最近はまともに受けとられない。究極の原因は、太平洋戦争の「滅私奉公」という掛け声である。司馬や半藤が嘆く、個人の欲望の拡大は戦後の大きな潮流で、戦争中の「滅私奉公」への反撥から生じている。戦後の混乱から高度成長時代にもその「滅私奉公」思想は生きていて、会社への「滅私奉公」であり、「豊かな生活」構築のための「滅私奉公」であった。生活が豊かになって、「滅私奉公」は行き場を失った。戦後の「滅私奉公」は、究極的には個人の欲望充足を求めており、その「滅私奉公」は危うく、「公」は判然としていないとも言える。個人の欲望充足に仕えるばかりであったとも言えよう。

現代日本人は、行くべき方向を見出せないでいる。特に倫理の確立が急務である。阪神大震災の時のボランティア活動や被災者のもっていた秩序感覚は、日本人のなかに倫理が生きていることを示している。まだまだ生きている倫理感覚をこれからどのように生かしてゆくか、かっての戦争中の「滅私奉公」に陥らないためにも、個々人が考えてゆかねばならない。

２．倫理の多様な側面

太平洋戦争の「滅私奉公」は、当時の日本人の守るべき倫理であったが、戦後はそれが否定された。「おのれを殺して世の中のために尽くす」という言葉に胡散臭さを感じ、「滅私奉公」には顔をそむけるのが、現代の日本人の個人尊重であり、それは私欲の尊重という様相さえ見せた。しかし戦後「滅私奉公」が必ずしも全否定されたわけではなかった。高度成長期の猛烈型サラリーマンは、会社に対して「滅私奉公」であったのである。これが意味するところは、倫理は相対的なもので、多様な側面をもっているということである。

『国語大辞典』（小学館）には、「倫理」は「人のふみ行なうべき道、人間関係や秩序を保持する道徳」とあり、「道徳」と言い換えてよいようである。『儒教とは何か』（中公新書）で、加地伸行は二種類の道徳、即ち普遍的なものと相対的なものについて次のように言っている。

> 道徳には二種類がある、とする考え方がふつうである。一つは、普遍的なものである。たとえば、人を殺さないとか、人を裏切らないとかいったもので、古今東西を通じて、人々が納得するものである。いま一つは、その時代その社会に適合した慣習である。たとえば、奴隷制の時代では、主人に絶対的に服従するとか、社会主義国家では、私利の追求を禁ずるとか、といったものである。
>
> この二種類において、前者は不変であるが、後者は時代や社会の変化に応じて変化する。だから、道徳と言うとき、それがいったいどういう種類を指しているのか、まず確かめなくてはならない。たとえば現代では、夫が妻以外の女性に子どもを産ませることは不道徳である。のみならず、法的にも誤った行為とされる。しかし前近代の東北アジアにおいては、男系を優先するから、男子を産めなかった妻以外の女性に男子を産ませることは、儒教的には、不道徳どころか、むしろ道徳的だったのである。(99)

普遍的な倫理は、最近では阪神大震災の時の人々のボランティアによる救助活動である。自分のことしか考えない人種とされ、否定的に扱われた若者が自ら救助にかけつけたのである。それに対して、相対的なものは、「その時代その社会に適合した慣習」であり、「時代や社会の変化に応じて変化する」ものである。戦争中は国家への「滅私奉公」が尊ばれ、戦後はそれを否定する風潮の中、生活確立のために会社等への「滅私奉公」が尊ばれ、生活が安定すれば、会社への「滅私奉公」は否定されるのである。そのような相対的な側面をもつ倫理の中で、技術者の倫理とはいかなるものであろうか。

戦後の技術者の一つの姿として、司馬遼太郎が『風神の門』で描いた、彼が技術者とする忍者の生き方は次のようなものである。

> なにもののためにもはたらかぬ。ただひたすらに、

おのれのためにはたらき、技術を売ってのみ、世に送り、主人に犬馬のごとく仕えることはしない。たれかの奴婢になるためではなく、技術だけでのびのびと世をひろやかに生きていく。

これは、戦後の技術者の生き方の理想を描いたものと言えよう。国家への「滅私奉公」には、懲りた。その徹は踏まぬ。「技術本位、個人本位、仕事本位」である。これは一つの倫理である。ここには、個人の優位があり、主人に仕えない。組織には当然、従属しない。これは、戦後の一つの精神的なあり方を具体化したものであると言えるが、司馬はこのように書きながら、「滅私」にこだわった作家であり、自分の精神構造の基盤に「滅私」があると言う。

私はどうにも、自分自身の生活や行動や心理については、それを記録して他人に見せるだけの話題価値を見出せない人間なのである。（「自分の作品について」）

別の形で次のようにも述べている。

ある日、空海のことを考えながら道を歩いているうちに自己が一点になってきて、その一点が背後からきた車に接触することによって転倒し、ころんだ一点がばかばかしいことに肉体として起き上がり、車にむかい、お前は悪くない、私が非である、歩道から十センチがかり外れて歩いていたぶんだけ非である、と判定してしまったことがありますが、その判定はともかく、とっさの反射で自己がそのようにしか作動しないようでは、私には本来小説を書く能力がないのではないかという平素の、そして少年のころからの疑問をいよいよ深めたりしました。小説が自己を拡大する作業であるとすれば、自己を縮小することをもって創作の経過のひとつにしているような私の場合、結果としての小説にどういうぐあいに自己が拡大されているのか、たとえ拡大されていなくても、微量な自己が作品に拡散されているのか、その微量なものがどこにあるのか、自分ではまったくわかりません。そういう自分がいやだといっても、しかし自己を縮小せねば自分以外の物などが見えるはずがなく、そう考えてゆくと、私が書いてきた小説というのは、小説というちゃんとして古典的概念にあてはまるのかどうか、つねに疑問のままでいます。
（「自己を縮小して物を見る」）

これは、自己意識が希薄であると自分について語っているものである。自分の個人的な部分について語るのを嫌うが、作家として地位が固まるのつれて、自分について語ることを求められる。司馬は、自ら自分についての小説である私小説を書くことを嫌った。司馬は、このような自意識の希薄な傾向を、ただ自分の性癖とするのでなく、それがものを見る場合に大事なのだと、普遍化し、本質化して言っている。

物を見るというのは、自分を極小にまで縮めて行って、できれば空の一点になりおおせるときが、もっとも鮮やかに見えることでしょう。（「自己を縮小して物を見る」）

自己意識の希薄さは、「滅私」と言い換えられるが、「滅私」がものを見る場合に重要だと普遍的な真理として提示されている。加地が、相対的な倫理を「時代や社会の変化に応じて変化する」ものとし、「その時代その社会に適合した慣習」であるとしたことの例として、「滅私」をあげ、戦中戦後の「滅私」への反応の違いに触れた。そのような相対的な「滅私」に対し、司馬の精神的傾向としての「滅私」は、司馬にとって本質的なものであり、絶対的なものである。そのような性向をもつ司馬ゆえに、必然的に、司馬の描く人物も、その性格をもっている、代表的なのが、『花神』の大村益次郎＝村田蔵六である。蔵六という名前自体が、彼の自我の特質を示していた。

蔵六とは亀の異称であった。頭、しっぽ、それに四本の足を甲羅のなかに蔵してしまうためにその称がある。亀が、その六つの動くものをかくしてしまえば、河原の石ころとかわらない。世間の波風や、名利の世界から、蔵六はつまり蔵六になってしまっているつもりであった。
妙な男であった。かれは後年、古今まれな軍司令官になるのだが、かつて歴史のなかでの将軍たちのなかで、これほど自己顕示欲のうすい人物がいたであろうか。（中 111）

蔵六が石ころのようになって、目と耳を塞ぎ、足をしまってそのために動こうとしなかった「名利の世界」は、自我が首を出し、食いつこうとする、私欲がもっとも出る世界であった。蔵六が「石ころ」と同じ「豆腐」になっている姿が次のように描かれている。

いずれにせよ、豆腐のような変哲もない時期である。もっともこの時期、幕末史にとっては最終段階に入っ

た狂風怒涛の時期なのだが、革命政治劇には役のない技術屋の蔵六にとっては、まあ豆腐のような時期であった。

この時期に、高杉晋作が死ぬ。

「高杉晋作が死ねば村田蔵六は名実ともに倒幕軍の大将になる」

という、嫉妬をこめた声（とくに下級武士から）もあったが、技術者の視点以外にもとうとしない蔵六には、たれが大将になろうとその点の関心が薄い。

「私は、一介の百姓あがりである」

と、そのまわりの門人にはしばしばいった。（下 64）

蔵六は、「技術者としての視点以外にもとうとしない」（下 64)技術者で、政治運動の渦中を動き回る人間ではなかった。蔵六の場合、「技術屋」であり、技術者に徹底していることがマイナスの評価を得ていない。司馬は、蔵六が技術者に徹底していることを高く評価している。蔵六は、「ものごとの本質を見抜く目をもっている」（上 246）のである。

蔵六は、人間に関心がなく、科学技術だけに関心があるのであったが、蔵六の人間性そのものが、科学技術でできあがっているようなものであった。彼は徹底的に合理主義者で、合理的な考え方しかできない、技術者が人間になったような男であった。有名な彼の挨拶がそれを具体化している。

患者が「お暑うございます」と挨拶すると、「夏は暑いのがあたりまえです」と人の顔を逆撫でするようなことをいった。患者たちは腹をたてて近寄らなくなった。（下 420）

夏は気温が高く、暑くなるというのは、合理的な説明である。蔵六は、人間関係を円滑にする術を知らなかった。

時代の道具として存在しているこの男は、道具がそうであるようにつねに目的主義であり、その間の日常的な人間関係を円滑にするといったようなことには、まったく顧慮しなかった。（下 269）

蔵六は、物事を理詰めで考え、「幾何学的な論理性、その論理が裁断する現実分析」（中 295）を身につけ、「事物や事象のなかから本質を抽出し、それを記号として抽象化する」（中 315）能力に優れていた。戦場で木や川を点や線と見なし、人間も記号として見ていた。大きな影響力をもっていた西郷隆盛の影響力をまったく受けなかった。

蔵六にとって海舟やら西郷やらといった存在は、情義的風景としてはいっさい見ていない。この新政府の難局をのりこえるについて、みずからを一個の土木機械に化せしめ精密機械に化せしめ、ときには火薬に化せしめて、新政府の基礎工事をするだけであった。（下 286）

蔵六は、「土木機械」や「精密機械」であることに満足していた。そのように司馬は書いている。蔵六には、「技術者」としての存在があるだけであって、蔵六の「人間」としての存在はないとも言える。それは、司馬遼太郎という小説家を悩ませた。司馬は『花神』の「あとがき」で次のように書いている。

「いったい、村田蔵六というのは人間なのか」

と、考えこんだこともある。

しかしひらきなおって考えれば、ある仕事にとりつかれた人間というのは、ナマ身の哀感など結果からみれば無きにひとしく、つまり自分自身を機能化して自分がどこかへ失せ、その死後痕跡としてやっと残るのは仕事ばかりということが多い。その仕事というのも芸術家の場合ならまだカタチとして残る可能性が多少あるが、蔵六のように時間的に持続している組織のなかに存在した人間というのは、その仕事を巨細にふりかえってもどこに蔵六が存在したかということの見分けがつきにくい。（下 419）

蔵六は人間としての存在感が希薄である。なした仕事が残っても蔵六は残らない。司馬は「男というものは大なり小なり蔵六のようなものだ」と思う。司馬自身も、その一人に思えるのだろう。そこに、司馬の「滅私」の性向を見ることができる。このような蔵六の「滅私」は、松本清張が書いた技術者と対照させたとき浮き立ち、その相違が際立ってくる。

３．松本清張の『火の縄』

松本清張に『火の縄』という作品がある。最初、「雲を呼ぶ」という題名で「週刊現代」に昭和３４年５月から１２月にかけて連載されたもので、単行本になる時に題名は「火の縄」になった。火縄銃、または種子島銃の名手、稲富伊賀守直家の物語である。これは、「技術と人間」の物語であり、「技術者」と「その倫理」の物語

である。

司馬の描いた技術者の典型である蔵六に対して、清張の『火の縄』は、強烈な自我の人が登場人物である。主人公稲富伊賀は強烈な自我をもった技術者であり、その主人になる細川忠興もその妻の玉もそうである。この物語は、それら三人の強烈な自我の衝突の物語とも言える。そして司馬によって描かれた、技術者の肯定的側面が、否定的な光をあてられることになる。その物語は以下のようである。

戦国時代、丹後の細川藤孝の子、忠興は、明智光秀の娘の玉を妻にしている。細川父子は丹後一円を支配していたが、その支配に属さないのが、一色義有であった。両者は敵対していたが、光秀が融和策として伊予という藤孝の娘を義有に嫁がせる。伊予は、逆らうこともできず従うが、内心ほっとしていた。伊予は父親の藤孝とは愛情のこもった関係をもっていたが、兄の忠興、そして嫂の玉を嫌った。兄夫婦はともに気性が烈しく、勝気であり、冷たいものを感じ、圧力も感じていた。それに対して、あまり教養のなかった夫の義有に好感を抱いた。何の恐れも警戒心もなく、寄り添うことができた。しかし夫の義有は、父と兄の策略によって殺されてしまう。本書の主人公の伊賀は、義有が伊予に引き合わせる。鉄砲の名手としてである。

そこには、たったひとり、ひどく背が低くて、ずんぐりした感じの、日焦けした若い男がすわっていた。彼は十九か二十くらいにみえたが、顔も野卑な感じで、眼だけが、剥かれたように大きかった。(33)

醜い男であった。「醜男で愛嬌がない」が、その技術は比類ない、「諸国随一」の見事なものだった。義有を細川藤孝が殺し、細川藤孝は伊予を救い出そうとする。それを庇うのが、伊賀であった。伊賀は伊予に心通うものを感じていた。

伊予は伊賀に命じ、藤孝の兵を近づけぬようにさせた。伊賀の働きによって、藤孝の命で伊予奪回を企む米田監物は、伊予に近づけない。その働きぶりに「伊予は眼を輝かせた」のである。落ち延びる時になると伊予は伊賀を連れていこうとする。二人の結びつきは強かった。しかし伊賀の技術を惜しみ、伊賀を藤川の者にできぬかと画策した米田監物は、遂には伊予を救うとともに伊賀を説得して、細川の者にしてしまう。

生きたまま帰ってきた伊予に対し、玉はきつい眼差しで自分なら死んでも帰らぬと言う。玉は美しく冷徹であった。それを見て、忠興は焦燥を感じる。玉の表情は「一騎打ちをしようとする気になる」こともある敵対的なものだった。忠興は、「妻のやわらかい唇を、手で毟りたい衝動に駆られた」のである。「玉の美しさをずたずたに引き裂きたい衝動」を忠興は感じる。気の強い、敵意に満ちた、威圧的な自我をもった夫婦であった。

清張は次のように忠興と玉という夫婦の自我を描いている。

しかし、夫の忠興に対しては、玉は幽斎のように心が融けないのである。夫の顔を見ていると、心のどこかで反抗が起こってくる。夫が自分を愛してくれていることは充分にわかり過ぎているのだが、その愛情がこちらの心に素直にはいってこない。いつも大きな隙間があった。

玉は忠興と一緒にいると周囲に壁を感じるのである。夫は、舅の幽斎と違って余裕がなかった。狭い中に閉じ込められたような息苦しさを覚えた。

夫の強さに堪らなく反発が起きる。向かいあっていると、たがいが敵同士のようであった。(400)

忠興の強烈な自我が、玉の強烈な自我を呼び起こす。忠興の自我は、自己顕示欲が強く、自己中心的で、支配欲が強い。玉も冷徹な自我の持主であるが、舅に対しているとその自我が融ける。藤孝の娘の伊予もそうであった。しかし伊予は玉のような強い自己主張をする凝固した自我をもたない。伊予も、忠興といると息苦しく、また嫂の玉に対してもそうであった。伊予は義有に嫁いで、安堵したほどだったが、その夫を父と兄に殺され、家臣も殺された。

義有の家臣で生き残ったのは、伊賀と万作という才智のある男であった。万作は権謀術数を弄し、裏切りによって出世しようとする。それに対し、伊賀が細川に抱えられたのは、「鉄砲の技」によってであった。忠興と伊賀との出会いは不運なものであった。

「ふん。どうせ猪や兎を追いまわしているうちに上手になったのであろう。工夫とは大形な云い方じゃ」

忠興は癇に障ったように云った。

治介は、忠興の顔をじろりと見た。もし、人間同士で、格別な理由もなくたがいが嫌いだったら、性に合わぬ相手というほかはない。忠興と治介との不運な主従の関係は、この最初の一瞥の交換で発生したといってもよかった。

治介の、じろりと見る眼つきが忠興には気に入らなかった。莫迦にしているようにみえた。(192－3)

倫理道徳の一つの関係に主従がある。主人への従順、

忠実が一つの倫理である。ここで、この主従には決定的な決裂があった。伊賀がまったく主従というものを受け付けないのではない。清張は、伊予との関係が心の通いあったものであったことを書いている。しかしもう一人の主人である玉との関係も、最悪なものであった。

「鉄砲か」
と玉は一言呟いたあと、整った唇のあたりに冷たい笑いをうかべた。
鉄砲か―
この呟きが耳に入ったとき、治介は玉の侮辱が真黒い水のようになって身体中に浴びせかけられたようになった。
鉄砲は足軽小者の持つもの、武士の表芸ではない。―玉のうすら笑いの浮いた唇がそう吐いているようだった。(281)

忠興もそうであったが、伊賀を侮辱している。それも鉄砲を侮辱し、その技術を侮辱している。これが、玉を見捨てさせることになる。

たとえ、忠興が伊賀を憎んでも、玉がそれほどでもなかったら、伊賀はあのとき、彼女の自殺を見捨てることもなかったであろう。だが、いつぞやの三戸野の山中で吐いた玉の言葉が、伊賀の胸にまだ黒い滓のように残っていた。
しかし、世間は、このような複雑な事情を知らない。他人は、ただ人の行動を外側で批判するだけだった。(460－1)

ここに玉の自殺を伊賀が見捨てたとあるが、これは、豊臣秀吉の死後の徳川家康と石田三成の対立に起因する事件であった。忠興は、家康方についた。慶長五年六月に上杉景勝が家康の上洛中に叛旗を翻した。家康が関東に下向した。家康方の武将には、大阪の邸に妻子をおく者があり、妻子は三成方に拉致され捕虜にされる恐れがあった。玉は覚悟を決めていた。忠興は嫌いな伊賀を玉のもとにおいて行った。

「あいつは、大阪に残しておけ」
云ってから、思いついたようにつけ加えた。
「そうだ、石田方が、邸に押し寄せたときの警固にせい。あいつの鉄砲はちょうど女子の警固に向いているわ」
この命令を、稲富伊賀は受けた。
のみならず、だれが洩らしたのか、忠興が最後に云ったよけいな言葉まで伝えた。
「ふん」
伊賀は、鼻を上に向けて嗤った。言葉はなかった。(443)

「あいつの鉄砲はちょうど女子の警固に向いているわ」という忠興の言葉は伊賀を侮辱し、伊賀を背かせる。三成方が玉の屋敷に殺到する。伊賀が鉄砲で守るあいだに、玉は自害をする手はずになっていた。玉の自害後、火薬を撒いて火をかける。女中を逃がし、重だった士分は切腹するはずであった。

来た、と伊賀は思った。
ふしぎに、そのときは、眼の前の敵よりも、玉のことが頭に浮かんだ。いまごろは自害の準備をしているに違いなかった。あの高慢な女が、どのように気どって支度をしているか、と思うと笑い出したくなった。
また、忠興は、今ごろ何を考えているか。女房のことが気にかかって眠れなにのではなかろうか。あのくらい嫉妬深い男も珍しい。(449)

この時点では、玉や忠興を嫌悪する伊賀は玉の自害の姿を空想して笑うにすぎない。それが、次の瞬間、自身の進退を問う立場におかれる。

「やはり伊賀であったか。それなら話をしよう。おぬし、ここからすぐに退散してくれ。」
「なに？」
伊賀は、自分の耳を疑った。
「おぬしの鉄砲は天下一じゃ。ここで、かけがえのないおぬしを死なせては、あたら妙技が亡びてしまう。われらは、それを惜しむのだ。おぬしを味方につけようとは云わぬ。天下のために、退去してくれ」
その男は口説いた。
「これからの武術は鉄砲じゃ。その技を天下にひろめるには、おぬしのほかにいない。どうじゃ、ここで無駄死にをするがよいか、それとも、天下に稲富流の砲術をひろめるがよいか。とくと思案せい」(451)

「・・・おぬしは己の技をもっと大事にするがよい。細川殿への義理は、これまでで立ったはず。お主が退散したとて、だれも笑いはせぬ。いんや、かえって、稲富伊賀の鉄砲が残ったと聞いて喜ぶ。それも、われらに味方せいというのではない。寝返りではな

いぞ。おぬしは、天下のために、その技を大事にしただけじゃ。これも武士のほまれじゃ。どうじゃ、ここで無駄死するがよいか、われらの心をくんで、稲富流の砲術を天下に伝えたがよいか、とくと分別するがよいぞ」

伊賀の心が動いたのは、その言葉を聞いてからだった。

彼は、何よりも自分の技術に執念があったので、己の技術が天下にひろがってゆくという説得に惹かれた。

そうだ、これは裏切りではない。大阪方に走るわけではなかった。己の技術保存のため、戦場から離脱するだけの話だった。命が惜しいわけではない、技術が惜しいのである。

が、すこし、どこかで後ろめたい気がした。それも、たちまち忠興が残した言葉を思い出したことで解放された。

—あいつの鉄砲は、おなごの警護に向いているわ。

女子の警護に向いているか、武士の表芸になるか、見せてやろう。伊賀は見えない忠興に叫んでいた。

糞。伊賀は鉄砲を抱いたまま、塀の上から暗い外の地上に飛び降りた。

歓声が、寄手の中からあがった。(452－3)

伊賀が主君の奥方の玉を捨てて、その場を去るようにとの誘いにのっていく。玉に仕える伊賀は、主従関係から、玉を守るべきである。それが道というものである。それに反して伊賀は、玉を捨て、その場を去る。倫理に反する。伊賀もそれは気づいている。だから「後ろめたい気がした」のである。しかし忠興への憎しみがその場を捨てさせ、伊賀は裏切りをしながら笑いさえする。

「稲富、変心、当家を裏切ったぞ」

邸内で騒ぐ声がした。

伊賀は、まっすぐに歩きながら、ふと、玉の顔を眼に浮かべた。彼は、げらげらと笑い出した。(454)

ここには、伊賀の玉へのそして忠興への人間的嫌悪がある。仕返しである。そして忘れてならないのは、その感情に技術が絡みあっているということである。伊賀が忠興や玉に侮辱されたと思ったのは、鉄砲の技術が大した意味もないものと言われたからである。そして「敵方の技術保存のため」という説得の口実が彼を裏切らせたである。「妙技が亡びてしまう。われらは、それを惜しむのだ」「天下に稲富流の砲術をひろめるがよい」「おぬしは己の技をもっと大事にするがよい」そして「寝返りではないぞ。おぬしは、天下のために、その技を大事にしただけじゃ。これも武士のほまれじゃ」という言葉で、伊賀は心を動かした。「技術が惜しい」から戦場を離脱するのである。技術者に対する最大の誘惑の口実である。

ならば、技術者という性格が伊賀の態度を決めたのかと言えば、「たとえ、忠興が伊賀を憎んでも、玉がそれほどでもなかったら、伊賀はあのとき、彼女の自殺を見捨てることもなかったであろう」という解説が思い出される。玉と伊賀の関係と対照的なのは、伊賀と伊予の関係である。二人には、人間的な心の通いあいのようなものがあった。伊予のためであれば、伊賀はたとえ技術者の魂に訴えかける誘惑の口実に耳を傾けなかったかもしれぬ、伊予とともに、伊賀も消えたかもしれぬ。現に伊賀は伊予を守り抜いている。騙されてではあるが、義有の弓木城に伊賀を置いて去ったのは伊予であった。

伊予は、忠興と玉には威圧される恐怖を感じ、「率直で、おおらかである」夫の義有について次のように言う。

伊予も夫の義有が好きであった。何のおそれもなく、警戒心もなく、彼の心に密着できた。この夫には、距離というものが全然なかった。それも、兄も忠興とは違う。忠興は、妹にも見せない部分を、いつも姿勢のどこかに持っていた。(26－7)

おおらかで素朴な夫と愛し合う伊予は、豊かな山国の自然に包まれて幸福であった。その豊かな自然の中から技術者、伊賀が現れる。そのようなつながりの中から伊予と伊賀の結び付きができる。それに対し、玉との関係は、閉ざされた、強烈な自我をもつ者同士の主従関係であった。その裏切りは、おおらかさを失って敵対した自我の関係で営まれる裏切りであった。

そして「世間は、このような複雑な事情を知らない。他人は、ただ人の行動を外側で批判するだけ」〈461〉なのである。「裏切り」は伊賀についてまわる。「裏切り」事件の後、「諸藩でそのように彼の技術を認めてくれても、やはり主家を捨てた行動が彼の暗い面になっていた」〈462〉という状況を生きることになる。さらに執拗に忠興が伊賀の仕官の邪魔をすることになる。そして家康と出会う。家康は、忠興の反対をさしおいて、伊賀を招く。それは、彼の技術ゆえであった。伊賀は最初、家康が彼の全体を受け入れて、尊重してくれたと思った。しかしそうではないことに伊賀は気づく。

家康は技術と人間に別別の眼を向けているのであ

る。人間的に、家康は伊賀を尊敬していないのだ。そこには主家を見殺しにして脱走した武士に対する痛烈な非難しかなかった。しかし、家康の伊賀の特技に向けるときの眼は、そののあらゆる学問の師匠に対すると同じように尊敬的であった。つまり、家康は、人間的には伊賀を歯牙にもかけないが、技術の面だけで彼を認めていたのである。(468)

「家康は初めから稲富伊賀を一人前の武士としての扱いにしていなかった」(468)ことを知り、伊賀は愕然となる。自分の技術のみが評価されて、自分の人間性は評価されておらず、自分は技術のみの存在にすぎないことを知る。そしてそのような自分に陥らせた技術を呪う。

彼は、今まで特権だと思っていた自分の特技を、これほど厭悪に感じたことはなかった。なまじ、鉄砲の技能があるばかりに己という本体を失った。世間もその技術のために彼を咎めないのである。彼の特技は尊重しているが、人間的には軽蔑しているのであった。要するに、「特技者」は、足がどの体制にも密着していないのである。

たとえば、彼はその技術ゆえに大阪方からも尊重され、徳川方からも尊重された。その前は、一色家からも大事がられ、細川家でも重臣がその技術のゆえに彼だけを一色家から生かして引き取ったのである。人間にしたら、これほど根のない人間もなかった。

伊賀は、己の人間喪失に、その夜、床の中で涙を流した。(469)

「稲富流の始祖が稲富伊賀直家とは後世に残っても、彼自身の『人間』は何も無かった」(470) と清張は書くのであるが、ここに清張と司馬の違いがある。司馬の蔵六は、自分のことなど残ろうと残るまいとどうでもいいのである。

目指す仕事の「道具」や「機械」であることに蔵六は満足であった。伊賀は、義有に仕えたときも、忠興に仕えたときも、伊賀でありつづける。それは傲慢にも見える。技術の自信からである。司馬が『風神の門』の忍者に「なにもののためにもはたらかぬ。ただひたすらに、おのれのためにはたらき、技術を売ってのみ、世に送り、主人に犬馬のごとく仕えることはしない」と言わせた。同じように技術者の独立性を清張は次のように書いている。

技術者は何の特技もない一般の武士よりはその地位を保障されている。武士に不安があっても、技術者には不安があっても、生活は安泰である。一般の武士から見ると羨望が湧く。彼らは己の技術を大事にし、それを磨いていればいいのだ。上役にとり入ることも、策略で同僚を蹴落とすこともない。(202)

伊賀は技術に仕えるのであって、この世の主従関係は、伊賀にとって二義的なものかもしれない。ちょうど玉が神に仕えていたように。その態度は、忠興を怒らせる。それも玉と同じである。伊賀は、最終的に技術に仕え、玉を見捨てた。怒り狂う忠興の執拗な邪魔によって、それ以後仕官はできなかったが、その技術は賞讃され続けた。しかし伊賀は、自分の人格が賞讃されていると思った。家康に出会い、その技術のみが賞賛されていたことを知った。司馬の蔵六であれば、それで満足であった。しかし伊賀は技術を呪う。この時点で、伊賀が技術に仕えきっていなかったことが明らかとなる。そうした形で悲嘆にくれている伊賀は、技術からも見放されることになろう。そして完全に伊賀の人格全体が崩壊することになろう。

４．おわりに

技術者は技術に仕えるのが倫理であると言えるだろうが、技術者が人間であるゆえに違う道を歩くこともあるように思える。清張は「忠興が伊賀を憎んでも、玉がそれほどでもなかったら、伊賀はあのとき、彼女の自殺を見捨てることもなかったであろう」と書いている。玉が伊賀を憎まなければ、伊賀は玉とともに死んだこともありえる。それをより明らかに示すのが、伊予と伊賀の関係である。伊賀は伊予の夫の死後攻め寄る細川勢に対し、その城を鉄砲で守り続ける。伊予は伊賀の働きを頼もしく思い、脱出をそそのかされた時も伊賀を連れてゆこうとした。脱出した後も伊賀を伴にすべき呼びにやらせる。それほどに伊賀を思っていた。伊賀はひたすら伊予が城にいると思い、鉄砲を撃ち続ける。伊賀はその技術ゆえに生き残るが、そのまま死ぬこともありえた。おそらく、鉄砲を撃ちつづけるあいだに、技術のために裏切るように誘われても、玉の場合と違って、伊賀は伊予を守りながら、死ぬ方を選んだように思われる。

技術よりも伊予を選ぶ。その場合の二人の結び付きはどのようなものなのであろうか。

伊予の嫁いだ義有の弓木城の周囲にひろがる山国の風景について次のような描写がある。

伊予は、よく弓木城の櫓の窓から外を眺めた。山

脈の起伏の上に当たる陽の変化も面白いし、秋が闌けて、凋落してゆく色の推移も興があった。雲に閉ざされた雨の日もよいし、轟々と樹林を鳴らして渡ってゆく風の日もよかった。曇った日は山の間に鳥が群れをなして飛んだ。(29)

夫の義有は、京育ちの伊予が山国の風景に退屈していると思うが、伊予はその風景が気に入っていた。それは夫のおおらかさや愛情とともにあるものであり、この風景への思い入れとこの風景の中から現れる伊賀への思い入れにつながりを見ることができるように思われる。伊賀は伊予の退屈をまぎらずために義有が伊予に初めて紹介する。それは忠興や玉との出会いとは違って、二人の思いが繋がったと思えるものである。伊予が最初に伊賀に気づくのは、山国の風景に響きわたる鉄砲の音によってであった。そして伊予は伊賀の妙技に素朴に驚くばかりであった。ここに伊賀と伊予の思いのつながりの原点がある。玉に見せた伊賀の強烈な自我は顔を見せない。伊賀はこの伊予を守るためその技術を使う。そのために死ぬこともありえる。技術がそこで断たれることもありえる。しかし伊賀は伊予を守りぬこうとした。冒頭に司馬の「おのれを殺して世の中のために尽くす」という倫理、そして「空を見ても、川を見ても、山を見ても、ああ美しい、いい国に生まれたなという思いを、子供たちに、残す」という倫理に触れたが、山国に見とれて美しいと思う伊予を守りぬこうとした伊賀の姿に、一人の技術者の「滅私」の倫理があるように思える。その倫理の根底には、伊賀は顔を赤らめて否定するであろうが、愛があるように思える。それは非常に人間的な側面であり、その出会いに導いた技術を伊賀は誇らしく思ったのではないだろうか。

引用文献

半藤一義：清張さんと司馬さん、NHK 出版、東京、２００２．
加地伸行：儒教とは何か、中央公論新社、東京、２００１．
司馬遼太郎：自分の作品について、『司馬遼太郎の世紀』、朝日出版社、１９９６．
司馬遼太郎：自己を縮小して物を見る、『司馬遼太郎の世紀』、朝日出版社、１９９６．
司馬遼太郎：風神の門(上下)、新潮文庫.
司馬遼太郎：花神（上中下)、新潮文庫.
松本清張：火の縄、講談社文庫.
引用文の（　　）内は頁数を示す。

（受理　平成15年３月19日）